



DKKYD

姫路獨協大学同窓会報

2001年8月15日

Vol. 8

特大号



写真:国際交流センターでの留学生ミーティング

■ 姫路獨協大学今昔物語 PART2

■ アンケート結果報告 Q&A 皆さんの質問にお答えします!

■ 各界で活躍! HDU同窓生!!

■ 交流深めるOB会 ~友情は永遠に~

姫路獨協大学 同窓会

〒670-8524 兵庫県姫路市上大野7-2-1
TEL (0792) 23-9263 FAX (0792) 23-9263

URL <http://www.hdud.gr.jp>

Eメール honbu@hdud.gr.jp

姫路獨協大学今昔物語 PART2

前回の会報発行以来、『姫路獨協大学今昔物語 PART1』をご覧になった会員の皆さんから、ハガキやメールで「懐かしかった」「感動した」「母校の現状を知ることができてよかった」といったお声が届くなど、かなりの反響がありました。それだけ同窓生の皆さんの母校、恩師への関心が高いからでしょう。そこで、今回も前回と同様に創立当時から教鞭を執る4人の先生方に、姫路獨協大学の過去を振り返ってもらうとともに、現在の状況を語っていただきました。

PART2

QUESTION

Q1 創立当時の思い出 Q2 創立当時と現在の学生の違い
Q3 姫路獨協大学の現状 Q4 同窓生へのメッセージ

戸田 宏

経済情報学部
教授

昭和3年1月17日生まれ。大阪大学卒。京都大学理学部教授（昭和40～平成3年）、姫路獨協大学経済情報学部教授（平成4年～）。

Q1 私が姫路獨協大学に赴任したのは大学創立からしばらくたってからのことなのですが、当時は今ほど設備も恵まれておらず、今あるものでやりくりしていた感がありましたね。例えば私の授業ではパソコンを使うことが多いのですが、その頃はまだ旧型のPC-98を使っていました。今から考えると処理速度はかなり遅く、比べものにならないほど性能差がありました。使い慣れていたせいもあってか、それほど不便は感じませんでした。その後、新型のMacが導入され台数も増えてきたことを考えると、今の学生は恵まれた環境にいるのだなと感じますね。

Q2 当時の学生には一言で言うと“勢い”がありました。私が教鞭をとって

る数学は、文系の大学のなかでは少数派であり生徒の数も少なかったのですが、それでも私を探して追いかけてくる生徒が後を絶たなかったように記憶しております。それに比べると今の学生は控えめなのでしょうか、質問をしてもらうことも少ない気がしますね。そして今の学生に見られる傾向なのが、途中で辞めてしまう人が増えたことです。以前の学生のようにサークルやイベントに積極的に参加しようとしなため、友達を作る機会が少なく、おのずと授業も欠席がちになる、そんな生徒が増えてきましたね。ただ持っている能力は高く、期待した以上のものを仕上げてくる生徒もおりますので、それに獨創性を表現できればもっと面白くなるのではないのでしょうか？

Q3 大学も「冬の時代」と言われ、深刻な生徒不足が大学の間で問題となっております。実際、入試においても定員割れが起こるなど圧倒的な売り手市場となり、学生が自由に大学を選べる時代となりました。その状況下で姫路獨協大学を選んで入学してくれたわけですから、ここで何かをつかんで卒業をして欲しいと思います。そのため、我々も以前とは違ったアプローチを取りながら、学生の能力を引き出す必要があると思います。

Q4 私はあと2年で定年となりますが、気持ちはまだまだ若いと思っております。年齢に関係なくいろんなことに挑戦しようとする前向きな気持ちが本当に大切なのではないでしょうか？ 社会に旅立った同窓生諸君、この先さまざまな困難が待ち受けていると思いますが、いつまでも若さを忘れずに頑張ってもらいたいと思っています。姫路獨協大学は人との出会いの場所だったと思います。ここでいろんなことを得たり、いろんなことを失ったりしたと思いますが、大学の4年間を時々思い出して訪問してみてください。



岡本 悌二

体育・教職課程
講師

昭和38年6月17日生まれ。日本体育大学卒。東京ガス（昭和61～63年）、姫路獨協大学一般教育学部助手（昭和63～平成7年）、同学部講師（平成7～12年）。平成12年から体育・教職課程講師に配置換え。

Q1 開学した昭和63年はまさに僕にとって人生の岐路に立つ大切な年でした。試合中のケガでノンプロ（社会人野球）の選手生活を断念せざるをえなかったその年、知人から姫路獨協大学の開学の話聞き、もともと指導者になりたかったし、自分の故郷に新設される学校であるという理由からこの大学にお世話になろうと決意しました。開学とともに教員人生をスタートさせた僕はまさに新入生と同じ。加えて学生と変わらない年齢（25歳）だったせいも、四六時中、兄弟のように学生たちと接していましたね。今でもよく覚えています。グラウンド整備やランニングなど、とにかく自分が先頭に立って行動し、学生たちと一緒に汗を流すことを心掛けていました。

Q2 開学当時の学生は個性的な子が多かったです。クラブの創設など先輩が誰もいない状況で苦労したとは思いますが、みんなイキイキしていましたね。教員生活の中で一番印象に残っているのはやっぱり彼らの存在です。それに比べて今の学生は硬式野球部の学生たちを例にとっ

ても、年々覇気がなくなっているように思います。実力的には当時の学生と比べものにならないくらい向上しているのですが、いかんせんアピール不足。こっちが言わないと動けない学生が多い。当時の学生は野球が下手でもアピール力があつたし、元気があつた。自分たちで野球を楽しもうという意識が高かつたですね。あと、できる子とできない子の能力の極端な二極化が年々進んでいるように思えてなりません。

Q3 少子化による志願者の減少が進み、本学のような地方の文系私学にとってはかなり厳しい状況です。そんな中、僕ができる最善の方法は、硬式野球部を鍛え上げ、好成績を残すことで大学の知名度をアップさせること。おかげで開学当時は10数名しかいなかった部員数が現在90名。毎年約30名の新入部員が入部してきます。春のリーグ戦で優勝し、念願の全国大学選手権大会に出場することが目標です。

Q4 僕が卒業式を迎えた学生にいつも言っていることなんですが、同窓生諸君の人生はまだこれから長い。厳しい状況が訪れることもあるでしょうが、チャレンジする気持ちをいつも大切にしていれば必ず道は開けてきます。大学時代の仲間は一生の友達。



合田 憲

外国語学部
教授

昭和20年3月13日生まれ。獨協大卒。学習院大大学院卒。獨協高校ドイツ科主任(昭和54~63年) 姫路獨協大学外国語学部助教授(昭和63~平成11年)、同学部教授(平成11年~)。



Q1 僕自身が獨協大学の一期生ということもあって、姫路獨協大学の一期生諸君を見て、自分自身の学生時代と比較することが多かったですね。彼らにも僕たちと同じく、新設校の学生特有のパワーがあった。声を大にして言いたいのですが、自分たちの学んでいる大学を愛していたんでしょうね。卒業生に会って話をしても今だにそれを強く感じるがあります。ただ、学友会に関しては学生自身が身近な存在とは考えていなかったようで、設立時にはよく「自分たちのものなんだから自分たちで頑張ってみよう」とハッパをかけていましたよ。

佐々木典子

法学部
教授

京都大学卒。京都大学大学院卒。姫路獨協大学法学部講師(昭和62~平成2年)、同学部助教授(平成2~平成12年)、同学部教授(平成12年~)。



Q1 まだ、大学施設が全く建っていない整地の段階からよく下見に来ていました。雨の中、泥よけ用の長靴を履いたりして(笑)。今は住宅や店舗などがいっぱい建っていますが、当時の大学周辺は田や畑や池ばかり。正直、「本当にこんなところに大学ができるのかなあ〜」とかなり不安でした(笑)。開学直後の思い出という、図書館の本を集めるのがとにかく大変だったこと。当時はまだインターネットが普及していなかったの、資料収集、整理はすべて手作業。のりとはさみを使って切り貼りしたりして…。今の時代では考えられないですよ。

Q2 一期生は「自分たちで大学を作るんだ」という意識がかなり強かったですね。やる気に満ちていて、自分たちでいろんなサークルを作った。やんちゃな学生も多くて、ゼミコンの時なんか私に向かって「僕は勉強は嫌いですがお酒には自信あるんですよ!」と言うやいなや、大きな器にお酒を注いでグビグビ飲みだす子がいたりして(笑)。とにかくみんな自己アピールが上手だった。それとは対照的に今の学生を一言で表現すると“指示待ち族”。こっちの言ったことに対しては素直に言うことを聞くという点では以前よりいい子が増え

Q2 どこの大学にも言えることなんですが、今の学生は当時の学生と比べて明らかにパワー不足ですね。これが全国的にクラブ活動が低迷している大きな要因と言えるんでしょうけれど…。加えて、物事を冷静に判断して行動するといった基本的な生活習慣が確立されていない。にもかかわらず、最近、「資格が取れなくて悩んでいる」という学生が非常に多い。昨今のパソコンや携帯電話の普及が影響しているのか、使い方をマスターするのは早いですが、それに自分の考え方や能力が伴っていない学生が年々増えているように思います。それに気づかなければいけないのは学生自身。大学は決して職業訓練校ではないのですから…。

Q3 どうしても学生中心の話になってしまうのですが、一言でいうと淡泊。それが今の学内の雰囲気にも現れているんじゃないでしょうか。授業はもちろん、就職活動や資格の取得に関しても、つまみ食いばかりしている。「ステーキを食べるんだったら、最後まで残さず食え」ってよく話をするんですが(笑)。大学の4年間って即効性の強いものではないと思うんです。よく学生や父兄から「いつから就職活動を始めたらいいいのですか」と質問されるのですが、勘違いしてほしくないのは、就職活動イコール資料請求や企業訪問ではないんですね。人との接し方、きれいな文字の書き方など、家庭教育の時点からすでに始まっているんです。だからいつも「もう始まっていますよ」と答えています。教員側も学生にその辺りから伝えていくべき時ではないでしょうか。そうすることが大学の活性化につながっていくと思います。

Q4 常に母校のことを忘れないでほしいと思います。見守るという言葉はいい言葉なんです、それだけではなく母校の文句を言えるような人間でいてほしいと思います。同窓会に関しては、関東の獨協学園との交流をもっと深めてほしい。共同体である以上、本学にとって同窓会の存在が決してマイナスにはならないのですから。

たような気がしますが、自分たちからは何も言っていないので、こちらからすれば何か物足りない。社会人になって人とのコミュニケーションを上手に取れるのかどうか、かなり不安ですね。

Q3 学生のマナーの問題が大きいですね。少子化といった社会現象の問題だけでなく、周りの環境が大きく影響していると思います。学生の学力や質の低下が問題視されている昨今、学生の現状を見て教員側がいろいろ解決策を模索していかなければならないと思います。補習に近いような講義を開講したり、就職支援講座を増やしたり…。法学部に関して言うと“法学部=司法試験=ムリ”と諦めてしまっている学生が多い。学生たちにはよく「先生はあなたたちの情報源。授業料を払っているんだから元を取らなければ損だよ」と話すんですが…。

Q4 同窓生のみなさんが大学時代は楽しかったといえるように努力していきたいと思います。大学生活が現在他方面で活躍中のみなさんの人生の糧になっていればこんなにうれしいことはありません。大学時代の勉強は同窓生にとってあくまでも出発点。今後ずっと“勉強”を続けてほしいと思います。

インタビュー後記

今回の「姫路獨協大学今昔物語」はいかがだったでしょうか? このインタビューを通じて、ありがたいなと感じることがあります。それは、どの先生方もいつも私たち同窓生のことを気にかけて、何かある時にはいつでも相談に来てもらって構わないと語ってくださっていることです。長らく母校から遠ざかっている同窓生は一度、

お世話になった先生を訪ねてみてはどうでしょうか?

さて、次号の会報でも「姫路獨協大学今昔物語」は続きます。インタビューしてほしい先生や聞きたい質問などがあれば、同窓会事務局までご連絡ください。同窓生の皆さんの参加をお待ちしています。

